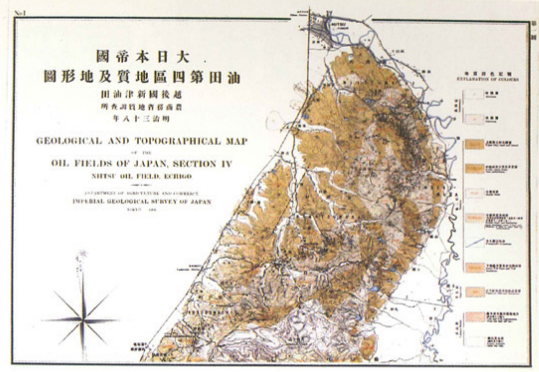
明治38年頃、中野鉱業部金津鉱場



1904(明治37年)	9月、宝田石油会社、宝扇商会所有の製油所(日宝町)を買収し第3製油所とする(43年新津製油所と改める)。
1905(明治38年)	中野貫一の協力で小倉製油所を金津に建設して、39年から大正3年2月まで、月産534.6キロリットル(2970石)を精製して、菊花印、汽車印の商標で出荷する。
1906(明治39年)	中野貫一は中央石油会社を設立し、朝日、柄目木でも成功した。宝田石油は中小会社の買収、合併を進め、小口、東島、柄目木、滝谷で採掘した。
1907(明治40年)	2月、日本石油会社、滝谷に製油所を設立する。6月、新津町の鉱業者、皇太子(大正天皇)の熊沢油田ご視察を記念して碑を建立、さらに付近を整備して熊沢公園とする。碑の表題「皇太子駐駕処」。この年新津油田の産油量1,712,306キロリットル(951,700石)に達し最高となり以後次第に減少する。
1909(明治42年)	中野貫一は中野合資会社(資本金50万円)を設立した。 中野合資会社は日産361キロリットルを採油した。新津油田全体で年産11万キロリットルに達した。
1910(明治43年)	4月29日、宝田会社所有の滝谷39号井が大噴油し、日産216キロリットル(1200石)に達した。同日柄目木方面では北方石油組合の2号井、中野合資会社のスター式1号井も続いて噴出、日産224.8キロリットル(1360石)に達した。以後多数の鉱業家が柄目木、滝谷の油井開掘に集中して、新津油田、全盛を極める。
1913(大正2年)	ロータリー式掘削機を導入し、5月7日、宝田会社小口7号井、大音響と共に石油を噴出、噴出量1昼夜180キロリットル(1000石)に達し、これより日石、宝田、両会社の採掘競争時代に入り、出油量は飛躍的に増大して、小口油田の全盛期を迎える。
1914(大正3年)	8月、宝田会社、小口油田において電力による試掘を開始する(日本における電力による石油掘削の最初)。
1917(大正6年)	新津油田全体で年産12万キロリットルに達する。
1918(大正7年)	中野貫一、中野合資会社を中野興業株式会社(資本金500万円)に改め、大正9年9月、資本金2500万円に増資し、社業発展する。
1919(大正8年)	4月2日、中野貫一、私財100万円を提供して中野財団を設立する。
1921(大正10年)	日本石油株式会社、宝田石油株式会社、合併する。
1923(大正12年)	5月、川口三ノ堰関係の農民500名、日石新津製油所などへ鉱毒問題で抗議、警察隊に阻止される(日石製油所、新潟移転の遠因となる)。
1926(大正15年)	明治45年から大正15年頃までが第2繁栄期である。
1941(昭和16年)	太平洋戦争が始まり、南方油田開発のため掘削用具を一部撤収し、南方に送る。
1942(昭和17年)	戦時体制で、石油開発会社は国策会社帝国石油に一本化される。
1947(昭和22年)	戦後復興し、年産2.5万キロリットルを生産する。
1958(昭和33年)	9月、帝国石油(株)新津鉱場が金津に「開基坪」の碑を建立する。
1968(昭和43年)	8月、帝国石油(株)より、かって中野興業(株)が開発した金津油田の鉱業権を譲り受け、丸泉石油興産(株)を設立して、採油事業を続ける。
1975(昭和50年)	9月4日、草水の「煮坪」が史跡として、新津市文化財第1号に指定される。
1996(平成8年)	3月31日をもって丸泉石油興産(株)は石油採収の事業を停止し、新津油田の生産が完全に停止する。